

日記21

無縛(oseh13)の日記ページへようこそ！

ベントナイト

ベントナイトは自然の鉱物を粉砕した粉状の物質であり、一見セメント原料風である。あるいは粘土にも似ている。しかしながらベントナイトは、元素吸着性に優れ、水が入ると膨潤して密になり、圧力を加えると押し固められて任意の形に整形できるなど、多くの優れた性質を示すために、工業上さまざまな用途に利用される。最近温泉ボーリング中にボーリングの穴からメタンガスが噴出して火事になるという事件があったが、この火事を消し止めたのも最終的にはベントナイトによる窒息消火であった。ベントナイトは産出地が限られ、産出地により性能が異なる。日本では東北地方に産地がある。

2005 年 3 月 22 日（火）

劣化ウラン弾

劣化ウラン弾は兵器ではあるが核兵器ではない。そもそも天然ウランは、核分裂しないウラン238（数字は原子数）が殆どであり、核分裂性のウラン235は全体の0.8%に過ぎない。そしてこの割合を少なくとも3%程度にまで高めないと、爆弾はおろか原子炉内でも核分裂しないために、遠心分離等の方法によりウラン濃縮を行う。このときに出る残滓が劣化ウランである。ウランは金属として見ると硬度が高いので、劣化ウラン弾は例えば対戦車砲のように鋼鉄をぶち抜く玉として用いられる。つまり劣化ウラン弾は、ウランの核分裂性を利用しているのではなく、物理的な硬度を利用した武器である。かつ不要物の「廃物利用」でもある。しかしながらいくら劣化してるとはいえ、少量の放射性ウランは残っている。これら少量の核分裂性ウランが、結果的に白血病の危険性を秘めているとして、NPO 団体等が使用反対運動を繰り広げている。

2005 年 3 月 21 日（月）

「逃げるが勝ち」は合法か

最近、亜細亜大学のエースの野球部員が痴漢をして逮捕され、有罪判決を受けると言う事件があった。これ自体はママ有る事件なのだが、この事件が他の痴漢犯罪と少し異なるのは、実は他にも一緒に痴漢をし

ている奴が居て、そいつは逃げて亜細亜大学生だけが捕まり、有罪になったと言う点だ。逃げた方の奴はいまだに見つかっていないので逮捕されておらず、有罪にもなっていない。と言うことは、「逃げ得」は合法なのか。合法ではないが、見つからない以上仕方ないのだ。そして軽犯罪だから3年もすれば時効だ。時効とは法的安定性の要請の最たるものだ。結局法律は、現実の利害を調整するものだから、極めて現実的であって、「しかたない」と言う場合はあるのだ。だから「逃げ得」は合法とはいえないが、実際にはある。

2005年3月20日（日）

花粉症

今年もそろそろ花粉症の季節がやってきた。今年は去年の猛暑等の影響で飛散量が多く、記録を更新するかもしれないとの事だ。ところでこの花粉症、なっている本人にとっては難儀なことだが、その機構は、人体の粘膜の異物に対する免疫の過剰反応である。つまり、花粉と言う異物を排除して人体のホメオスタシスを保とうと言う自衛能力が人より高度なために、花粉症はおこる。だから、花粉症になる人はむしろ自分の敏感さを誇って良いのだ。

2005年3月19日（土）

バイブレーションモード

今の携帯電話には「マナーモード」という機能が付いている。着信を音で教えるのではなく、振動で教える機能だ。この技術は何の変哲も無いローテクに見えるし、実際そうなのだが、ここにはちょっとした発想の転換があると私は思う。と言うのは、振動現象は、自動車でも家電でもどこでもたいがいそうなのだが、どうしても発生してしまう厄介者で、いかにして防止・低減するかが開発すべき技術だからだ。実際振動により、ねじは緩むし、はんだははがれやすくなるし、亀裂は進展するし、乗り心地（使い心地）は悪いしで、良いとこなしである。たいていの工学者にとって振動は負のイメージである。これを逆に有効移用しようと言うのは勇気が要る。実際私も、携帯電話が振動するたびに、「基盤がはがれないかしら」とつい心配してしまう。

2005年3月18日（金）

GPS

GPS は”Geological Positioning System”の略で、衛星の発する電波を用いて物体あるいは人の位置を突き止めるシステムのことである。衛星派もともと軍事技術であるから、GPS 技術は軍事からスピンアウトした技術と言うことになる。精度の高い受信機だと、民生用でも1m以内の誤差で居場所を突き止めると言う。この技術が、最近の安全重視の文化の進展とあいまって、多方面にその応用先を見出している。例えば、徘徊老人に付けておけば、その居場所をすぐに突き止められると言う具合だ。なお、GPS により受信した緒情報を地上で整理・表示する技術(ソフト)を GIS と言う。”Geological Information System”の略である。GIS は近年、GPS 対応のみでなく、広く地理情報表示ソフトとして認知され、用途も大きく広がっている。

2005 年 3 月 17 日（木）

計算機落ち

「計算機落ち」とは数学科の学生に通用している軽蔑語で、純粋数学についていけそうになく高校か予備校の教師くらいしかポストが望めそうにない人が、純粋数学をあきらめて、理論の程度は低いけれども就職には断然有利な、計算機周りの「研究」にシフトすることを言います。自分の母校にポストを得られずに、地方の大学のポストに移ることを俗に「都落ち」と言い、これはどの学科にも有る現象ですが、計算機落ちは数学科でのみ言われます。計算機落ちさえすれば、総研、銀行、証券、メーカー、他大手の緒会社に就職できますが、こちらも年齢制限があるので(おおよそ35歳)、数学を専攻した人は30歳前に自分の身の振りを考える必要があります。ぼっとしていると指導教官の先生にやんわり言われます。

2005 年 3 月 16 日（水）

あとは余生を過ごすだけ

知り合いの某有名大学教授に聞いた話である。その先生の学生時代の同級生で、卒業後インテル・ジャパンに入社した人が居た。インテルとは、知っている人も多いと思うが、世界の PC の CPU の大半を造っている優良会社である。そしてその人は、インテル・ジャパンの副社長(日本人ではナンバーワン)に長いこと就任し、50歳を機会に退職して、自ら会社を起こすでもなく毎日ぶらぶらしているそう。そしてその人いわく、「もう一生分の金はためた、あとは遊んで暮らすだけ」とかで、奥様と一緒によく世界旅行をしていると言う。そしてその教授いわく、「良い人

生している奴が居るよな、僕もそっちをやりたいよ」。私から見れば自由の塊で、かつ聞こえも良い大学教授ですらあこがれるその人生、私もうらやましく思ったのは言うまでもない。「一生外人の下」と思えば悔しい気もするが、そこさえ割り切ってしまうれば贅沢な人生だ。人間ちょっとした気付きが大切な好例である。

2005 年 3 月 15 日（火）

征露丸

整腸薬として誰でも知っている「正露丸」は、むかしは「征露丸」と書いた。100年前に日露戦争の際に、兵隊に配ったのが始まりのため、戦勝祈願をかけた勇ましい名前を付けたわけだ。ところが時代が下ると政局も変化し、かような名前は不適切という判断により、音を変えずに「正露丸」の標記にしたものである。似たような例に、先年 GE キャピタルに買収された、「東邦生命」がある。この保険会社は戦時中は「徴兵保険」と言っていたが、戦後時流に合わず、改称したものである。「富国生命」は改称せずに今もあるが、元は徴兵保険と同じく戦勝祈願の命名であった。この外に帝人（帝国人絹）やダイキン（大日本金属）、帝人（帝国人絹）のように略称で本来の意味を薄めた社名もある。

2005 年 3 月 14 日（月）

天気を返せ

米国開拓の歴史は、原住民であるインディアン駆逐の歴史でもあった。たいした火器を持たないインディアンたちは、住みよい場所からどんどん追いやられ、今では山間地の「リザーベーション」と呼ばれる特別区にやっと居住地が与えられている状態である。この状態を称して、インディアンたちは、「我々の父祖の地を返せ」とは表現せずに、「我々の天気を返せ」と言ったそうである。インディアンから見れば、奪われたのは土地ではなく環境であったというわけだ。言い得て妙である。

2005 年 3 月 13 日（日）

TOB

TOB は、“Take-over Bid”の略で、株式の公開買い付けのことをいう。会社の経営権を支配するには、その会社の株式の50%超を手中に収めなければならない。そのためには、信託機関などを通じてひそかにやるのが通例であるが、乗っ取りの企図を公表し、相当額の買取値段を提示することにより、機関投資家のみならず、広く一般投資家からも

株を買収しようと言うのが TOB のやり方である。だから、TOB を仕掛けるには、大量の資金がいるし、仕掛ける対象も内部留保の多い優良会社でないという意味が薄い。日本では今まで余り使われなかった手法であるが、それでも特殊電装メーカーのコイト、環境関連商品のタクマなどが TOB の対象になったことが有る。資本主義の先進国である米国では日常茶飯事で、金融機関の中には、将来 TOB で買い取る予定の TOB 対象会社を担保に資金提供してくれる金融機関まであり、いわゆるレバレッジで、比較的簡単に敵対的 TOB すらこなしてしまう。

2005 年 3 月 12 日（土）

理科系の人間

最近、若者の理科系離れが激しいかからと言って、若者相手に「数理が好きになるセミナー」を開催すると言う話を良く聞く。一見国をうれいた美談のようだが、私にはこの理由が分からない。そもそも理科系人間はいわゆるオタクが多く、むかしから変人扱い、嫌われる人種であった。教授されることが特定の分野に偏っているのだから、変人になるのも不思議なことではない。特に女の子に評判が悪い。ベストセラーになったゲームの「ポケモン」にも、「理科系の男」「はぐれ研究員」というキャラが出てきて、偏屈で意地悪な悪役の代表として描かれている。加えて、理科系の学科は、それ実験だ、やれ実験だと拘束時間が長い割りに、就職すると会社では、研究開発要員に投入されて、学生時代自分より成績が悪かつ大学の4年間を遊び暮らした文系人間に使い捨てにされる。かような事実を若者は知っているのだ。だから小手先のセミナーなんかやったら、せいぜい主催者の自己満足で、大して効果もない。理系人間を増やしたかったら、先ず社会における理系人間の待遇を大きく改善することだ。

2005 年 3 月 11 日（金）

SQUID

“SQUID”なる単語を辞書で引くと、「イカの一種」と出てくるが、最近良く話題になる SQUID は、“Superconducting Quantum Interference Device”の略称で、超伝導現象を利用して磁場の乱れを測定する装置である。すなわち、物質が超伝導になると、抵抗値が零になり、その結果、マイスナー効果といって、その物質が完全反磁性の性格を持つようになり、磁場の不均一に対し敏感に反応するようになる。この性質を利

用して SQUID は、高性能な金属探知機として活躍している。税金逃れに庭に埋めていた金塊を発見したと言う話も有る。

2005 年 3 月 10 日（木）

RPG

RPG とは、"Roll Playing Game" の略である。これは、プレイヤーがゲームの主人公になり、敵などに対戦するうちに経験値を積んで成長し、その成長度合いに応じて設定画面が異なってくる、ゲームの一態様である。今人気のゲームの多くが RPG である。かようなゲームは著作物であろうか。著作物の定義は、「思想もしくは感情の創作的表現」と定義される。そして RPG が、たとえプレイヤーの技量で展開が変化するとしても、映画の著作物に該当することについては、判例によって明定されている（ときめきメモリアル事件）。この判例では、RPG が著作物であるからには、その経験値を勝手に書き換えるカートリッジの製造販売は、著作人格権の一つである同一性保持権違反であるとされた。さて、RPG が映画の著作物であるからには、製造元はそのゲームの頒布権を有し、映画の著作物の頒布権は消尽しないから、中古ゲームの再販は法に触れることになる。この点についても判例があり、ゲームは映画の著作物ではあるけれども、映画館で多くの人が一回に見ると言う特性がなく、頒布権を例外的に消尽させなくても製造者は製造資金を回収できるから、ゲームについては頒布権は消尽することとされている。

2005 年 3 月 9 日（水）

安藤忠雄氏

安藤忠雄氏に東京大学から特別栄誉教授の称号が送られた。副賞として総額数千万円の研究費付である。特別栄誉教授の称号は、この度東大が新たに新設した称号で、名誉教授と異なり勤続年数は問わないものの、極めて顕著な成果をあげたほんの数名にしか授与されないと言う。東大と言えば日本の学府の最高峰、ことさらに営業努力をしなくても優秀な生徒や人気の高い就職先が自然と集まってきそうなものだが、最近の東大の改革意欲には目を見張るものがある。この前も、東大の先生が開発した技術を応用したお土産品を「東大ブランド」として売り込み、一般価格より高めにもかかわらず、コンスタントに売れていると言う。大学の独立行政法人化の成果と言うべきか。で、こんど特別栄誉教授に選ばれた安藤忠雄氏、知る人ぞ知る異色尽くめの経歴の持ち主である。工業高校卒で元プロボクサー、単身米国に渡って独学

で建築学を学び、世界の建築学の主要な賞を総なめにした人物である。彼の建築技法の特徴は、光の巧みな使い方と、打ちっ放しの生コンクリート・テクスチャーである。壁面を敢えて飾らずに打設コンクリートそのまま壁とするのは、逆転の発想で面白いが、私個人としては、寒々として余り好きになれない。

2005 年 3 月 8 日（火）

スパース・マトリックス

マトリックスとは「行列」のことである。そして「スパース・マトリックス」とは、「疎行列」と訳されるが、行列の要素が殆ど零で、対角要素とあとまばらに数値が入った行列である。例えば構造にかかる応力分布を有限要素法で解こうとした場合、原則として隣り合った（境界を共有する）要素同士しか相互作用がないので、そのような組み合わせにない大多数の要素同士の関係を示す行列要素は当然に零になり、その結果行列全体はスパース・マトリックスになる。そしてかような行列は、構造解析にとどまらず、科学技術計算のあらゆるところに顔を出す。スパース・マトリックス自体は多体問題と同等で解析解が存在しないから、近似解法で何度も繰り返し計算をするしかないが、この計算の効率が数値解析全体の速さを支配するため、スパース・マトリックスの効率良い解放の課題は重要である。比較的良く使われるのが「SOR 法」で、これは、“successive over-relaxation”の略であり、一言で言えば、予想解に近づける係数 β を予想値より過剰に取ることにより、速く収束させようという方法である。アルゴリズムが簡易な割りに性能が良く、かつロバスト（問題を選ばない）ため、今でも良く用いられる。これよりもより複雑な解法として、「ICCG 法」、及びこのバリエーションがある。この方法は、固有値が1に近い時は極めて高速であるが、そうでないときは性能が落ちる欠点があって、しばらく打ち捨てられていたが、「非完全コレスキ分解法」という一種の前処理法が発見されて広く使われるようになった。原理は基本的に、行列の直交回転である。

2005 年 3 月 7 日（月）

カービン銃

米国産の機関銃に「カービン銃」がある。この商品名「カービン」の語源は、“Kerbim”である。ここで「ケルブ」とはヘブライ語で「天使」のことで、旧約聖書に良く出てくる。詳しく説明すると、「天使」の普通名詞は、“Malachay Shamaim”で、その実態は「ケルブ」と「セラフ」から成り、

ケルブの方が上位とされる。ケルブの最上位を占めるのは、大天使ミカエルであって、「ミカエル」とは、「神のような者」の意味である。第二位は大天使ガブリエルで、これは、「神のような勇者」の意味である。そして「ケルブ」の複数が「ケルビム」で、これが英語流になまって、「カービン」となった。人々を次々とあの世に送る「天使」であるから、皮肉なものである。

2005 年 3 月 6 日（日）

サーカディアン・メディケーション

光、特に強めの光が人の脳に刺激を与えられている。このことは脳外科の見地から証明されたことではないものの、各種の心理学的、人間工学的実験・統計により示されている。この現象を「サーカディアン」と言う。例えば周期的に、あるいは日々規則的に光を照射することにより人間（あるいは動物、植物）に生ずる生理的リズムを、「サーカディアン・リズム」と言う。この現象は特に三交代勤務のような深夜を含む勤務、あるいは地価職場のように日光の定期的な照射のない職場に置いて、労働者を覚醒させる手段として、あるいは労働者の生理をできるだけかく乱させない手段として、すでに実用に供され始めている。ところで人間の脳の発達に、幼児・児童時の規則正しい（特に夜更かししない）睡眠は重要であり、これを行わなかった児童は行った児童に比べて、脳の発達が遅れると言われているが、この遅れの矯正にも光の照射が有効であるという説が最近出ている。いわばサーカディアン・メディケーションである。

2005 年 3 月 5 日（土）

悪魔の証明

嫌疑をかけられたら、その嫌疑が誤解又は誤謬であることを証明・反論するのは、原則として嫌疑をかけられた人の責任だ。ところが世の中には証明が原理的に殆ど不可能な、「悪魔の証明」とでも言う場合がある。例えば現場不在証明がそれである。あるところで殺人事件があり、その犯人の嫌疑をかけられたとき、その嫌疑を逃れるには、事件発生の時に自分がそこにいなかったことを証明すれば足りる。ところが、「いなかった証明」と言うのが著しく困難なのだ。「別のところに居たことを示せば良いではないか」と思うだろうが、これは厳密には、「他所存在証明」によって「現場不在証明」に代えているだけであって、現場不在証明そのものではない。さらに困難なのが、商標法に於いて、商標を3

年以上不使用の場合はその商標を取り消すことができる制度で、「一度も使わなかった」ことを証明することだ。取消を請求する側が「絶対に使わなかった」ことを証明するには相手方の行動を知り尽くさないといけないが、商標権者が自分を守るには1回でも使用の実績を出せば済んでしまう。これでは事実上規定が効力を有しなくなるので、商標法の場合は、使用の証明責任を商標権者側に転嫁させている。

2005年3月4日（金）

教会学校論

先日カトリックをこき下ろしたが、ではプロテスタント（新教）はというと、これが実はまた、大いに問題ありだ。一番の問題点は、神秘性がまるでなく、殆ど宗教の体をなしていないこと。牧師も学生運動崩れなど「でもしか」が多く、説教も幼稚だ。要するに「祈祷に行く」と言うよりも「小学校に道德の授業を受けに行く」と思ったほうがよっぽど当たっている。こういう貧弱で靈性皆無の「説教」の後、静寂な瞑想の時間もなく、いきなり「祈りましょう」と来る。準備体操なしに素人がオリンピックに出場するようなものだ。成果などあるわけがない。だがもし祈りの成果を口にしようものなら、「我々はご利益宗教ではない」と厳しく注意される。成果がないことに居直ってあぐらをかいている業界など、ここだけだろう。その割りにやたらに委員会を作って仕事を増やす。ほとんどシュジュフオスの神話を地でやっている。そこで私は「教会＝小学校」論を提案したい。つまり教会はキリスト教のイロハを習うところで、最長でも6年在籍したら卒業して巣立っていく、そういう中間的機関であるとの位置づけがもっとも適切で健全で、分に合っているというわけだ。この観点からは今の教会は留年生が多すぎる。あのような面白くもなんともないクラブ活動に血道をあげるとは、よっぽど暇で困っていると思えない。

2005年3月3日（木）

賢い

今は華やかに見える科学技術の発展も、実際はせいぜい、ここ2世紀程度の歴史を持つのみである。その基本的手法は「分析主義」であって、その普遍性は、人文科学も含めて、どの科学分野であるかを問わないほどである。そして分析主義の大元には合理主義が、さらにその大元には、ルネッサンスに始まり革命を経て勝ち取った「啓蒙主義」「民主主義」「個人主義」がある。そしてさらに根源を探るならば、宗教改革とその結果生まれた「プロテスタンティズム」という「擬似宗教」にまで遡

ることができる。さて、ルネッサンス前の人々の発想は、分析主義の洗礼を受けていなかったために、優れて総合的であった。言語もその態様を表象している。すなわち現代語は1つ1つの単語が厳密かつ客観的に定義されており、個々の単語の受け持つ概念範囲は狭く、その代わり1つの減少を表す単語は原則として1つである。ソシユールの言葉を借りれば、“significant”と“signifie”がほぼ1対1対応しているのである。ところが古典語はそうではない。ここの単語の守備範囲は感覚に応じて定められており、したがって広く且つ互いに重なり合っている。例えば古典ヘブライ語、古典ギリシャ語にあっては、「風」を表す単語が「霊」の意味も表し、しかもこれらは別個に2つの意味があるのではなく、その単語が風から霊に至る広い範囲をカバーしているのである。ここに古典語の楽しさと、古典を現代語に翻訳するときの困難さがある。この状況は日本語でも同様である。「賢い」と言う単語を例に挙げると、現代語では「頭が良い」と言う意味しか持たないが、古典語では「高貴な」「やんごとない」と言う意味も併せ持っていた。だから神道では、神のことを「賢くも尊き」と表現し、天皇の屋敷を「かしこどころ」と表現した。そして「賢い」と言う語は、「頭が良い」と「高貴な」の二つの意味を常に併せ持って響いていたのである。なんと神秘でかつのどかな人々の知恵であろうか。現代人は過度の分析主義に疲弊している。もう一度牧歌的な古代に返ろうではないか。

2005年3月2日（水）

第2回バチカン公会議

数十年前、キリスト教、特にカトリックはそのご本家ともいえる欧州では、マンネリと時代錯誤と堅苦しい教義によって窒息していた。飽きられていた。信者も減る一方だった。そこで当時の教皇であったパウロ6世の呼びかけにより、世界の司教や枢機卿を集めて2回の公会議が開かれた。そして特に第二回バチカン公会議において、ミサ（礼拝式）の改革案が決定された。改革案とは、①ミサにラテン語を廃止して各国の現代語によることとする、②賛美歌に旧来のものを強制せず自由に作って良いこととする、③異端の定義をゆるくし他の宗教との交流を図る、というものであった。この改革案は、そこらの会社顔負けなほどに巧妙である。つまり、現代人に受けるように譲歩していると見せかけながら、その実一歩も譲歩していない。つまり、本質的でないどうでも良いところだけ「譲歩」して、「はい、譲りましたよ」と見せかけつつ、本丸は驚くほど無傷のまま温存しているのである。賛美歌を作成自由にしたと

ころで、素人がたいした曲を作れるわけがないし、ラテン語をやめたからといって、かえって重みがなくなったという弊害がある。また、異端の基準を緩めたことは、一部のはみ出し神父を喜ばせたに過ぎない。人々も馬鹿ではないから、このような「改革」で、信者の減少は多少は食い止めたかもしれないが、かつての勢力の復活には程遠いのだ。そして何よりも、「神の領域と位置づけ」を人が牛耳るこの「改革」は、カトリックが嫌われる大元であるところの、「尊大さ」「傲慢さ」が見え見えである。

2005年3月1日（火）

日記22

無縛(oseh13)の日記ページへようこそ！

みんなでやればみんな死ぬ

昔、漫才師のセリフで、「赤信号みんなで渡れば怖くない」と言うのがずいぶんとはやったことがあった。これは一つの真理を付いていてしかも意外性があるので受けたのであろう。ところが今度の件は「みんなでやればみんな死刑」のようである。ほかならぬオームサリン事件である。先日、法王庁幹部の岡崎被告の死刑が、上告審が最高裁で破棄されて確定した。他の幹部たちも似たり寄ったりの運命をたどるであろう。大勢でやれば一人の罪が薄まる言うことは、法曹の世界にはないのである。ところで、死刑判決が確定した場合のその後の取り扱いには、過去の経験上2通りがある。すなわち死刑が執行される場合と、執行されずに獄中で病死する場合である。判決の原因となる行為の主体及び内容が明らかな場合はたいてい判決から3～5年以内に死刑が執行される。冤罪の恐れがないからであろう。これに対し判決が、状況証拠の積み重ねによって得られた場合には、死刑は執行されない場合が多い。帝銀事件の平沢貞道が良い例である。裁判制度といえども人が人を裁く制度であり、誤謬なしとしないことを現実的に調節していると言える。オームはヨガの流れを汲んでいるので、輪廻転生を信じている。しかし

あれだけ罪のない人々を苦しめたのだから、次の生はより下等な生であろう。

2005 年 4 月 20 日（水）

ユーザー研究と研究所の研究

一言に研究・技術開発と言っても、それを実施する主体が、大学や国公立の研究所か、はたまたユーザーによるものでその仕方はずいぶん異なる。前者の場合は基礎研究重視で、極論すれば、「役に立たなくても新しく面白ければ良い」といった類の研究が多い。基礎を象る基本的な成果が多い反面、研究のための研究や自己満足の研究が多い欠点もある。一方、ユーザー企画の研究はこれと対極にある。鉄道を例に取れば、鉄道技術総合研究所が前者、JR 各社が後者に当たるが、ユーザー研究は、「古かろうがつまらなかろうが、役に立てば良い」と言うのが基本の方針である。ユーザー自ら研究することは少なく、たいていはメーカーや私立の研究所に委託するが、ユーザーのリクエストパターンは決まっていて、何か問題が起きると第一声は、「多少不正確でも根拠レスでも良いから早く評価基準を作ってくれ」である。で、受託先が制度や研究価値を犠牲にしてラフな評価法をとりあえず開発し、さて精度の高い本格研究に移ろうとすると、「もう出来上がっているのにいつまでやっているんだ、そんな予算はつけない」とこうなる。しかも、こういうことを言うのはユーザーでも事務屋ではなくて技術屋と分類されている連中なのである。前者の「タコが自分の足を食って生き延びる研究」も困ったものだが、後者の「技術者魂を捨て切った研究」にも問題は多い。

2005 年 4 月 19 日（火）

市場を汚した

ホリエモンの一連の格式公開買い付け事件について、ソフトバンク系列の投資会社社長の北尾氏はホリエモンを、「市場を汚した」と痛烈に批判した。この一言には日本の市場、ひいては会社、社会観に関する重要な意味が凝縮されているので、ここで取り上げてみたい。すなわちもし北尾氏が、「堀江氏は市場取引で違反をした」と言うのならその意味は明快だ。市場に関する法規（例えば商法、証券法）の規定に抵触したと言う意味になり、これは司法の場で決着をつければいいのだ（私個人的には抵触していないと判断するが）。ところが北尾氏は「汚した」と表現して怒りをあらわにしている。「汚した」と言うからには、市場には「合

法か違法か」と言う基準のほかに、「きれいか汚いか」という別の基準があることになる。こんなことはどこにも書いてない。摩訶不思議な発想だ。そして北尾氏の言う「きれいな市場」とはどうも、旧来日本の任侠的な仲良し主義、親分子分主義のことを言っているらしい。だから北尾氏は、「任侠道も知らない若造がちゃらちゃらするんじゃない」と言っているわけである。実は年配の経営層にはこういう任侠病が蔓延していて、しばしば役員選任への無言の基準になっている。おかしいことでは有るがまかり通っていて、綺羅星のような学歴、経歴を持つ人たちが自ら進んで任侠になろうとする。そして海外留学まで下経験のあり、自分の経歴を挙げるためにあちこちを転々としたベンチャーの旗手のような北尾氏ですらその一人だったと言うわけだ。日本にここまで任侠道がはびこっていようとは驚きだ。ホリエモンは信長よろしく、こういった日本の旧来の悪しき風習をぶち壊すために立ったのだから、まず北尾氏をこそこてんぱんに血祭りに挙げて欲しい。ちなみに著名な評論家の大前研一氏はホリエモンのことを「良くぞやってくれました」とべたほめである。

2005 年 4 月 18 日（月）

宗教は硬化する

先日ある宗教団体の番組を見ていたら、その団体に属する若者の証として、次のようなものがあつた。その若者は高校時代に野球部のエースだった。そうして甲子園予選も結構勝ち残った時に、次の対戦日とその宗教の青年部交流会と重なった。その青年は悩んだ末に、年に1回の交流会の方に出たので、野球部の予選は欠場した。そしてその高校は予選に負けた。その日以来他の部員が彼によそよそしくなった。その悩みを親に話したところ、親は「私たちの宗教を理由に迫害されるなら、これほどうれしいことはない」と、喜び励ましてくれた、というのである。要するにこれは美談の証と言う位置づけだったのだ。私はこれを見て疑問に思った。その青年にとって、一生に一回で練習も積みみんなに期待された予選大会と、今年行けなければ来年行けば良い青年交流会と、客観的に見てどっちが彼を必要とし、彼も成長できるのであろうか。それは明らかに野球大会のほうだ。それにもかかわらず青年大会出席を強制する宗教のかたくなさ、私はこの一種のマインドコントロールに背筋が寒くなった。私は決して宗教の狂気をここで一番に強調したいのではない。宗教の狂気、そういう面もあるが、私がここで一番に訴えたいのは、一生に一回しかなくかつ期待されていた予選会をも蹴らせるそ

の宗教のかたくなさ、すなわち衰れさである。宗教もできたばかりでまだ教祖が生きているうちは、外からの迫害はあるかも知れないものの、内的にはもっと融通が利いていたものと思う。宗教は、それが本当の生きた宗教であるならば、むしろ融通無碍であるはずである。「青年会は来年出ればいいから今年は予選会に出場しなさい」という穏当な結論が出せるはずである。それが宗教も年が経て既成化してしまうと、「何が何でも宗教優先」とめくらのに教条化する。しかもご丁寧なことに、その教条的選択を賛美する屁理屈すら用意されている。ここまでくれば「宗教は狂気だ」と言うしかない。この辺に宗教の難しさが有る。

2005 年 4 月 17 日（日）

水道水の出方

水道のカランを少しだけ回して、水道の蛇口から水を少量出してみる。すると、蛇口では太めであった水が、落下するにしたがって細くなり、更には玉に分裂するのを見ることができる。この変遷はどのような理由によるのであろうか。水道水を落下させている力は地球の重力である。重力は常に働いているので、水道水は落下とともに速度が速くなる。ところが水の量は変わらないので、水道水は落下とともに細くなる。これが細くなる理由だ。次になぜ更に玉になるかというと、水道水が極めて細くなると、断面の曲率が大きくなる。そして水には表面張力があり、表面張力は曲率に比例する。そして、水道水がある程度細くなると、断面方向には曲率は大だが流れの方向には曲率がほとんど零と言う擬似円柱の状態よりも、曲率がどちらの方向にも存在する球状の方がエネルギー的に安定する。こうして水道水は、ついにはぶつぶつの球状になる。

2005 年 4 月 16 日（土）

上請け

かつて日本がまだ高度成長の時代だったころ、工事等における「下請け」体質が、一種の無責任体制、弱い者いじめとして、社会問題になったことがある。子受け、孫受けは当たりまえ、まごまご受けあたりが実際に手を汚していると言うわけだ。ところが最近、この「下請け」に代わり、「上請け」が社会問題になっている。ここ最近地方の発言力が増し、工事をするにもその地方の賛同がなければやりにくくなっており、地方は賛同のいわば見返りとして、地元発注を希望する。その結果一次発注はしばしば地元企業に行くようになったが、田舎の零細企業にそ

れをこなすだけの實力はない。そこで地方企業は工事を請け負った後、上前をピンはねして、残金で仕事を中央の大企業に丸投げすることになる。これを世上「上請け」と言う。中には「うちは東京の〇〇建設さんと組んでいますから、安心して発注してください」などと露骨に言うところもあると言う。体の良いピンはね構造であることに変わりはない。

2005年4月15日（金）

大酪農業国アメリカ

先ほど米国からライス国務長官が来日したが、訴えていったことはほとんど「牛を買え」の一言に尽きる。あれではまるで、国務長官ではなく牛宣伝官だ。かつて日本の首相が訪米すると、「電気家電と車のセールスマン」と揶揄されたものだが、米国だって似たようなものだ。なぜこうなるのか。そう思う時の違和感の根底には、「米国は科学技術大国」というイメージがあるのかと思う。確かに米国は世界の科学技術をリードしてはいるが、米国全体を眺めた時、あの国は決して「科学技術立国」ではない。生産高で見ても、従事者数で見ても、アメリカははるかに、「一大酪農国」なのである。あの広い土地に物を言わせて、世界の食料基地なのだ。それは、ロシアがまだソ連だったころ、冷戦をしながらも穀物は輸出していたと言う歴史も証している。だから、米国にとって牛の輸出は、日本の家電や車に匹敵する重要事なのである。この「米国は大酪農国」と言う図式を正しく認識しないと、米国の取る行動を理解することはできない。

2005年4月14日（木）

35歳

住友銀行の頭取だった磯崎さんは、「35歳前に金をためる馬鹿、35歳を過ぎて金をためない馬鹿」と言われた。なかなか含蓄のある言葉である。前半は、「若いうちから小金をちまちまためているようなけつの穴の小さいことではたいした人物にはなれない。もっと自分に投資して経験や人脈を築きなさい」と言うことだ。その通りだと思う。そして後半は、「35歳過ぎて自己投資をやめるわけではないが、一方で自分の人生設計もできないようではこれまた単なる浪費家であってろくな人物になれない」と言うことだ。そしてその境目が35歳になるという。35才と言えば、転職ももう考えずに自分の人生に打ち込むべき年齢でもある。以上総合して、上記した磯崎さんの言葉は、例えば「葉隠れ」の名言ほど人生の真理を突いていると思われる。

2005 年 4 月 13 日（水）

誠意が認められる

以前読んだ話である。ある娘さんが車に轢かれて死亡した。目撃者が複数あり、明らかに車を運転していた側の暴走運転であった。現場にブレーキのあとは一切無く、しかも目撃者によれば、その娘さんは車の全部でなぎ倒された後自力で起きようとして更に後輪に轢かれたという。つまり暴走車がブレーキさえかけていれば少なくとも死ぬことは無かった。その暴走少年は現行犯逮捕され、刑事事件として検察に告訴された。その日から被害者の家に毎日のように加害者の親族と言う人が訪れるようになった。ひたすら謝罪の言葉を述べ、つきの命日には一緒に墓参りもし続けた。その熱意に感じ入って、被害者の父親は軽い気持ちで、「加害者の反省は認められる」と言う一文を書いた。加害者の親族はその一文を直ちに裁判所に提出し、それ以降加害者の親族は一切来なくなった。しばらくして不審に思ったその父親が裁判所に問い合わせたところ、裁判は結審していて、父親の書いた一文が「被害者の遺族の感情」として大きく考慮され、加害者は無罪になっていたと言うのである。ブレーキも踏まず、ほとんど殺人に近い事故であったのに、加害者親族にほだされた父親は、自らの手で、娘を殺したにつつき無反省な少年を無罪にしてしまったのである。その父親はそれを知って以来、気が触れたようになってしまったと言う。悲しい話ではある。裁判の書面主義の盲点を突いた知能犯と言える。だが私は、長く人生をやってきて、それでもなお、その一文がどういう意味を持つかも分からなかったその父親のあまりにももの常識の無さの方に驚いた。父親は背中で威厳を語ると言うが、その父親の背中はずいぶん貧弱であったことだろう。ちなみにその父親の仕事は高校教師とあった。さもありなんと思った。生徒に威張るだけで人生経験の少ない、かわいそうなほどにそれが職業病の職種だからである。

2005 年 4 月 12 日（火）

信楽高原鉄道事故

信楽高原鉄道は、滋賀県の甲賀市貴生川から信楽（しがらき）までを結ぶ単線の私鉄である。信楽は焼き物の町として有名である。この田舎ののどかな私鉄で数年前に電車同士の正面衝突事故があり、死人が出た。原因は系統制御システムの不備による信号機の誤作動であった。「半分人災」と言われたものである。そしてこの事故の原因が特定

されたすぐ後で、信楽鉄道の系統制御システムを審査し認可した、かつての運輸省のお役人が、「責任を感じて」自ら命を絶った。この役人はいわゆるキャリア組で、入省したてのころにこのシステムを担当したと言う。その後事故があるまで省内で順調にキャリアを積み上げ、将来を嘱望されていた。そこに「降って沸いた」この事故である。日本の許認可行政は極めて多岐にわたりその量も多い。だから審査官が案件一つ一つの細部にまで立ち入ることなど到底不可能だ。審査官は申請者から一通りの話を聞き、「全体として大丈夫」との心証を得た時は認可してしまう。今回の案件もそのようなものだろう。だがだからと言って担当審査官に全く責がないとすると、何のための審査か分からなくなってしまう。よって、不運にもこの役人さんは、審査官時代の仕事に一つの汚点を抱えてしまったことになる。専ら減点主義のお役所にあつて、この汚点は将来を目指していた者にとっては黒星だ。おそらく次官、局長クラスは諦めだろう。そして私は思う、この役人さんが自ら命を絶ったのは、事故への責任と言うよりも自分の将来を悲観してのことではなかったかと。出世なんて水物で、「実力3割運7割」と言われる。こう割り切れれば気も楽になるというものだ。だがこのまだ若い役人さんは、そう簡単に割り切れなかったようである。

2005年4月11日（月）

五丈原は必要だったか

後漢時代の末期、皇帝の血を引く劉備玄德は、貧乏貴族として、寄るべき土地も財力も無く、ただ乱れた治世を平和にしたい、人民の喜ぶ政治をしたいと言う熱意と人徳のみで各地を点々とする。その間に軍師となる諸葛孔明と出会い、彼の献策で、南下してきた魏に呉を対峙させて赤壁の戦いで勝利し、ついに蜀の国を打ち立てる。魏に比べれば数分の一の小さな国であったが、劉備はやっと己が理想を実現する領土を得たのである（天下三分の計）。しかし劉備は間もなく病に伏し、後を孔明に託する。託された孔明が行った政策は、国内的には民主・自主・公開の原則に沿ったものであったが、対外的には領土拡張政策であった。そのために険しい山間部を押して魏の国に攻め入り、五丈原で命が尽きる。五丈原とは後世には、人民政治が潰えた象徴的な土地なのである。さて、天才軍師の諸葛孔明に意義を立てる厚かましさを私は持ち合わせていないが、五丈原方面への進出は本当に必要であったのであろうか。蜀の国が立地した四川地方は山がちな辺境で、人口密度も少なく土地も肥えていなかった。しかしそれでも人まとまりの土地であ

り、魏や呉との国境は決して人工的な線引きではなかった。であるから、孔明としてはいたずらに領土拡張を図るよりも、先ず蜀と言う小さな国で極楽浄土を築く、少なくともこの一点に集中すべきでなかったか。もちろん彼は良い内政をした。しかしあわせて領土拡張を図ったために「二兎を追うもの」になってしまい、その後半生は意味無くぼやけた物になっている。加えて過労により事実上命を縮めている。惜しむらくは彼が内政に専念してかつそれを長く行い、歴史家をして「中国に蜀の治あり」と言わしめるに足るかっこうなる先例を作れなかったことだ。

2005 年 4 月 10 日（日）

熊沢天皇事件

北条氏が滅びた後、後醍醐天皇は建武の新政を宣言し、天皇自ら政治を執り行うことを宣言し、このために足利尊氏を中心とする武家集団と軋轢が生じ、尊氏はついに後醍醐天皇を廃して別の天皇を立て（北朝）、ここに南北朝時代が始まった。この朝廷が2つ存在するという異例の状態は、その後数世代を経て南朝側が北朝側に合流すると言う形で終焉し、実際は尊氏が立てた北朝側が存続したのだが、戦後間もなく、熊沢さんと言う人が、「自分こそ南朝の正統な子孫である、系図も存在している」と主張して「即位」しようとした。俗に言う熊沢天皇事件である。世の中の大勢は冷ややかで、熊沢天皇は冷嘲の対象でしかなかったが、本人は大まじめで、もしかしたら奇人の類だったかもしれないが、少なくともほら吹きではなかったようである。そもそも系図と言うものが、どんな系図であっても多少は胡散臭く、しかも真偽の確認のしようが無いので、実際のところは分からないが、この事件も熊沢さんの死亡とともに立ち消えて世の中から忘れ去られてしまった。少なくともご子息（お世継ぎ）が追って即位したとは聞いていないので、熊沢さん一代限りの騒ぎであったようである。やや不敬な物言いかもしれないが、世の中この程度に笑える話題が有った方が楽しいように思う。最近で言えば「有栖川の宮事件」と言ったところか。

2005 年 4 月 9 日（土）

フィボナッチ数列

フィボナッチ数列とは、第1項目が1、第2項目も1とし、第3項目は第1項目と第2項目の和で2、第4項目はその前2項の和で3と続く数列である。この数列は最初ルネッサンス時代にイタリアの数学者のフィボナッチが提案したものである。この数列の面白いところは、数列の元はす

べて整数であるが、数列の元を一般解で表そうとすると必然的に無理数（もちろん代数的数であるが）が入ってきてしまう点である。つまり、せいすうのみからなる自然な数列を表そうとすると必然的に無理数が必要されてしまうのである。この意味で無理数は、単なる便宜や人間の想像上の存在ではないことになる。論理が自然数のみでは閉じないのだ。もっとも現代の数学は自然数を特別扱いしていないから、現代数学の教育を受けた者には違和感が無いであろう。しかしわずか1世紀半前、大数学者のクロネッカーは、「整数は神が作り給った。あとの数（少数、無理数、虚数等）は人が作り出したものだ」と言っている。不幸にして現在このクロネッカーの美学を継承する数学者は居ないが、私は上記したフィボナッチ数列のような「反例」が有ろうとも、クロネッカーの整数のみを特別視する数学の世界は、決して数学全部に及ぶとは言わないが、そういう世界も存在すると思っている。ただし、私がクロネッカーに賛同する根拠は、整数論によってではない。整数論は単に、加法の他に乗法を導入した結果生まれた鬼っ子に過ぎないからで、解けない問題がたくさんあるといっても気にする必要もないからである。

2005 年 4 月 8 日（金）

「E電」の末路

もう何年も前、当時の国鉄が、東京環状線の愛称を作ろうとして、有識者からなる委員会を立ち上げたことあ合った。自分は表に出ずにすぐに委員会を立ち上げて「中立でござい」という奴らの手法には、私的にはもううんざりだったのだが、加藤芳郎とか有名大学教授とか、人畜無害な癖の無い奴らが委員になってこの愛称を決めた。ふたを開けて出てきたのが、「E電」と言う呼称であった。わざとらしい人造語の響きが極めて不潔だ。こう言った新造語を「お上」で決めてわれわれ下々の物に賜ってくれたわけだが、どっこい我々だって、一寸の虫にも五分の魂、こんなきれいごとがまかり通るはずもなく、誰も使わないうちに見事に消え去った。まあ、誰も損していないから良いようなものだが、日本は共産主義社会でも強権社会でもないのだから、日常のものまで「これを使え」と命令されると頭にくる。

2005 年 4 月 7 日（木）

そして靴だけが残った

著名な靴のメーカーに「リーガル」がある。高価なブランドではなく、むしろ庶民の靴作りなのだが、こと「丈夫な靴」についてリーガルは過剰な

ほどの自信を持っている。いわく、靴作りを数十の工程に分けて、工程ごとに厳格な工程管理をしている。いわく、材質には丈夫で長持ちを考えて源泉抽出している、等である。これらにうそは無いと思う。私も一度履いてみたが、確かに固くて頑丈で、永遠に長持ちするかのようだ。だが、それにもかかわらず履き心地はよくなかった。第一に靴が固すぎて、足の方を靴に合わせるしかない。第二に重くて、殆ど鎖玉を引きずっている感だ。第三に、汗が抜けなくて足が蒸れる。極めつけは階段で滑った時だ。足は守られたし靴も曲がらなかったが、簡単にくるぶしをくじいた。普段ならくじかない程度のすべりなのに、いともたやすくひねられてしまった。そして分かった。リーガルは靴としては立派なのだが、「人が履くもの」という概念が完全に欠落している。木を見て森を見ていないのだ。おそらく私が交通事故にあって体中骨折したとしても、靴だけは無傷で残るであろう。そんな靴はもう履きたくない。

2005 年 4 月 6 日（水）

バストリカ

インドに古代から伝わっているヨガ、この「ヨガ」とは英語の“yoke”（くびき：動物を農具等とつなげる物）と同語源で、「神との一体化」あるいはそのための手段のことである。したがって、目標は一つでも到達の仕方は種々あり、例えば知識によって神と一体化するヨガを“jnana yoga”（ニヤーナ・ヨガ）という。薬（薬草）を用いるヨガもある。日本で一般によく知られているヨガは、体操または特殊なポーズによって神と一体化するヨガ、すなわち“hata yoga”（ハタ・ヨガ）である。一般にヨガでは音とか波動を重視する。この宇宙全体、あるいは神の本質が波動であると考えているからだ。彼らが良く唱える「オーム」という言葉も、a-u-m-n”という音、すなわちもっとも根源的な波動を抽出したもので、この音を唱えているだけでも頭の頂部にある「サハスララ・チャクラ」が開いて解脱に至ることができる」とされている。同じく波動の一つとして「息」がある。息は往復運動であり、正しい姿勢でこれを行えば、六根清浄になるとされている。その息の、ちょっと変わった呼吸法に、「バストリカ」がある。その名称どおりに、ふいごのように息をする。すなわち、鼻で強く息をするのだが、最初はゆっくり、次第に早く強くしていき、最速になった後に一気に吹き出すと言う呼吸法である。できれば先生について練習した方がよいが、この呼吸法はヨガの初歩であるにもかかわらず、驚くほどの体内の浄化を経験することができる。

2005 年 4 月 5 日（火）

野口英世の母

新千円札の顔が夏目漱石から野口英世に代わって、野口英世が再び脚光を浴びている。生家のある福島県では観光の目玉の一つにしようという動きも見られる。野口英世は明治時代の偉人で、活躍の時からかれこれ100年経つので、お札にならなければ、例えばフランスの細菌学者パスツールのようにそろそろ忘れられるころだったのだが。さて、野口英世は幼いころ事故から、手にやけどを負って指がくっついてしまうという後天的な不幸を負うが、返ってそれをばねにして勉学に励み、ことに彼のやけどを治癒した医学に感動して細菌学者を志し、生涯に3回もノーベル賞候補にノミネートされたほどだが、彼の勤勉にはやはり勤勉で厳しい母の指導があったと、戦前の人ならみな習った。英世の母は幼いころ、学校に行くだけの資力が無かったのだが、勉学の心抑えがたく、学校の庭へ通って教室からもれ聞こえる先生の声で勉強したと言うのである。この「母親勤勉論」に異議を唱えたのが往年のヘブライ学者の山本七平であった。質平いわく、「もしそこまで勉学を極めたいならなぜ更に女子師範等に進まなかったのか。彼女が小学校の庭に通った熱心さは、勉学を愛する心と言うよりは、他の子と同じになりたいという意地であったと考えられる」。この見解は極めて現実的であり、納得できる。理想よりも現実を重視して不要な飾りをつけないヘブライ思想を端的に語っている。私がヘブライ思想の真髄に触れた最初の逸話であった。

2005年4月4日（月）

和民(わたみ)

同じく商売の話だが、今回は余り芳しくない話を。「居酒屋」+「食事屋」の意味で「居食屋」をうたい文句に、「豊富な種類のつまみをそろえた食べる飲み屋」の「和民」が全国チェーンを大々的に展開したのはもう十年も前のことであろうか。居酒屋についてはカリスマ的存在である、「つぼ八」の石井誠二さんの指導も受け、近代的なオーダーシステムと米国風の法務管理を武器に伸びてきたかに見えた和民が、今や会社更生法寸前であるという。「赤い看板」で同業界の「魚民」を経営しているモンテローザグループに仕掛けていた提訴もさっさと閉めて、全面でこ入れをするという。結局、最初の「食べて飲める」「家族で飲みたい」が裏目に出て、「飲み屋にしては高い」「食堂にしてはまずい」と中途半端になってしまったようだ。肝心の売り物に人気が無いと、いくらシステムが米国的、近代的でもリピータが出ない。こうして、かような近代的食

のチェーン店では初めてであろう、赤字転落の憂き目に会った。どんな商売にもソフトとハードの両面が必要であることを教えてくれた、和民の将来はいかに。

2005 年 4 月 3 日（日）

スーパードライ

ビール業界にあって久しく万年最下位、返品の山に悩んでいたアサヒビールが、「こくきれ」の「スーパードライ」の発売で、ついにビール業界第1位の地位を不動のものとした。スーパードライの発売当時、ビールの味を変えろと言うことは、極めてリスクなことであって殆ど間違い沙汰であった。それをあえて決断した当時の社長（住友商事常務からの天下り）は、「お尻が無い状態だからできたこと」と述懐している。実際このときアサヒビールが取った決断はまさに社運をかけるものであって、この会社が持つ最上の土地であった墨田区内の工場跡地を売却して新ビール製造に当てると言う、資産の切り売りによってであった。しかしながらスーパードライは予想を超える大ヒットを記録した。そして、おりしもバブルの地価急騰の中にあったにも関わらず、この会社はスーパードライの利益により先に売った墨田区内の一等地を難なく買い戻して、ビール園も入った一大ビール基地を再構築している。そしてスーパードライ以来、ビール会社が味を変えろと言うことは当然と言う新たな文化まで出来上がってしまった。今は社長も生え抜きから出るようになり、リクルートもずいぶんと楽になった。ここに商売の典型を見る思いがする。

2005 年 4 月 2 日（土）

解夏(げげ)

レンタルで、昨年話題であった映画の「解夏」を見た。ストーリーは、ベーチェット病という原因不明で治療困難な難病にかかってしまった若者の主人公が、恋人の愛に支えられつつ、失明するという運命を受け入れてひたすらに生きていくと言うものである。最近の純愛ブームに乗った作品の一つと言うべきであろうか、舞台となっている長崎の景色の紹介にもなっていて、ご当地物としても楽しめた。さて、題名の「解夏」であるが、発音が通常でないことから推認できるように、これは仏教用語である。仏教はインドに発生したが、インドでは初夏はモンスーン気候で、「生まれつつある虫や草などの多くの生命を踏み潰さないために、この期間は布教に出ずに屋内にこもって修行に励む」と言う仏陀から

始まった習慣がある。これを仏教では「夏安居（げあんご）」、あるいは単に略して「夏（げ）」と言う。今で言えばちょうど6月初めから7月終わりにくくらいである。松尾芭蕉も「奥の細道」で、「暫時は滝にこもるや夏の初（しばらくは滝にこもるや夏（げ）の初め）」と言う句を読んでいるが、この句で季語は夏（げ）であり、これは先に述べた夏安居のことで、季節は初夏である。そして、夏（げ）の始まりを「結夏（けつげ）」と言ひ、終わりを「解夏（げげ）」と言う。これが映画の題名になっている。映画でも主人公は2月ころ発病して田舎の長崎に帰り、しばらくして地方史を研究している住職に会い、その住職に「失明に向かいつつ生きる、これは行である」とその宗教的意味を教わる。そして、「完全に失明した時にその行は終わるのだ」と説かれる。ちょうど結夏のころである。そして解夏のころに彼の行は終わりを告げる。

2005 年 4 月 1 日（金）

日記23

無縛(oseh13)の日記ページへようこそ！

顔の見えない広告

先日の朝日新聞に、憲法（特に第9条）「改正」反対のぶち抜き記事が2つ載った。1つは「今の憲法を守る会」と称する会のもので、もう一つは共産党のものであった。平和憲法がなぜ共産主義理論に合致するのは良くわからないし（むしろ改正反対票の吸収行為に見える）、私個人も共産党（特に民青）は大嫌いであるが、こちらの共産党の広告の方がはっきり顔が見えて、広告として優れていると思えた。他方の「守る会」の方は、この会自体が周知でも著名でもないし、どんな会かの解説もないし、代表者や発起人の氏名すらない。そして内容はおそらく正しいのだろうが旧態依然としたものであった。この「守る会」の宣伝はほとんど効果がなかったであろう。改正論議が、改正試案の発表や改正日程と具体的な手続論に移ってしまっている現在、このようなお決まり

の抽象論などほとんど何の役にも立たないことを「守る会」の連中は誰も読めないのであろうか。誰も読めないからこのような広告になったのであろうが、そんな時代感覚で居る時点で既に負けている。憲法を守りたかったら明確で具体的なものでないと意味がない、時代はもうそういうがけっぶちまで来ている。

2005 年 5 月 21 日（土）

力学系

力学系は、一時代前に流行した数学の一分野である。多様体（多次元曲面）上にベクトル場を連続かつ微分可能に分布させた時の、そのベクトル場に沿って動く点の行動様式を预言する学問で、セパトリックス（分離線）、アトラクター、分岐、鞍点、ポアンカレ写像等が重要な概念で、多様体上の位相幾何の物理数学的応用と見ることもでき、当時やはり流行した一連の非線形数学、カオス、フラクタル、カタストロフィーなどとも密接な関係を持った。で、この力学系理論であるが、自然科学から社会科学目で多くの分野に適用され多大の成果を収めたが、私から見ると2つの限界があった。第一に、基本的な解析ツールと視点はトポロジーであるため、定性的な結論しかえられない傾向があること、第二に、どの教科書でも明記はされていないが、力学系理論は暗黙に固定場（時間とともに変化しない場）しか扱っていないことである。これらは数学者から見れば、問題を解析可能にするための理想化であって当然の行為なのだが、応用する立場に立ってみるとはなはだ物足りない。例えば定常運転しているトカマクのトーラス内の磁気シアの解析には用いられるが、このような場は現実には例外であって、気象場のように場の構造が時々刻々変化する場の方が圧倒的に多いのである。数学者はよく「このままでは解が多すぎて問題にならないので、条件を加重する」と常識のように言うが、他の分野ではこれでは使えなくなってしまう。もちろん数学者も、一定の条件での理論を構築し終わると、より一般的な条件に問題と解を拡張するのであるが、動く場での力学系理論と言う分野がちっとも出てこないところを見ると、数学的には不毛で定理の立ちにくい分野だったのだろう。純粋数学が現実から乖離する典型例がここにある。

2005 年 5 月 20 日（金）

牛伏寺（ごふくじ）

牛伏寺は長野県松本市南東部の山すそに位置する古刹で、弘法大師が開祖と伝えられる由緒のある真言宗の寺である。この寺の名は仏教界は当然のこととして、意外なことに地質学者、地震学者に良く知られている。日本列島の中央部を縦に走る中央構造線のこの辺の断層を「牛伏寺断層」と呼び、地震学上重要な断層だからである。ところで「ごふくじ」の呼び名であるが、「午伏寺」の間違いではないかと誰でも思うだろう。ところが「牛伏寺」で合っているのである。そこで私は思ったのだが、牛のことをサンスクリット語（梵語）で”go”という。この語は印欧語族に置いて、”beef”や”cow”と同根の語であり、インド神話に詳しい人ならクリシュナの化身の一つに「ゴービンダ」（牛飼いの意味）があるが、この「ご」を取ってきたのではないかと推察した。何と言っても弘法大師が開いた寺なので、この程度の教養は自然と有ったはずだ。然るに最近「大字源」を調べたところ、「牛」には俗読みで「ご」という発音があると出ていた。おそらくこっちの方が正しいのだろう。正しいことを知って私の、高ボッチ山からカイルス山に至るひそかなロマンは崩れ去った。

2005 年 5 月 19 日（木）

急ブレーキは逆効果

先日の JR 西日本の尼崎事故は、100人を超える死者を出す大惨事となった。事故の原因や経緯は今後詳細に調査されることと思うが、大筋、カーブを設計上の制限速度を大きく超えるスピードで突入し、そのために遠心力により内輪が浮き、急ブレーキをかけたが間に合わず、脱線して沿線のマンション壁に衝突したということであろう。ここで注目したいのは急ブレーキである。車体の異常を感じた運転手が、いわばとっさの対応として条件反射的にかけたものと推察するが、この時点での急ブレーキは結果的には逆効果であった。電車やバスに乗っていてブレーキをかけられると、体だけ先方につんのめる経験はよくするところである。これは古典力学の法則である「慣性の法則」に体が従っているからに他ならない。電車の場合も同じである。急ブレーキをかけると、車体の上部が前方、従って遠心力の効いている方につんのめることになり、車体をより傾ける方に働く。ここからは推測だが、急ブレーキをかけなければ脱線しながらもマンションに追突せずに枕木を多く蹴飛ばして速度が弱まって自然減速し、あそこまでの大惨事には至らなかったかもしれないのだ。条件反射としての急ブレーキは仕方なかったとしても、新型 ATS の設計にはこの効果をぜひ考慮していただきたい。

2005 年 5 月 18 日（水）

文部科学省は良くがんばった

次世代の国際熱核融合炉”ITER”の候補地が、ヨーロッパ代表のフランスはカダラッシュに事実上決定した。トカマク型核融合実験炉はこれまで、ヨーロッパ連合、米国、ロシア、日本がそれぞれ独自に、互いに成果を競いながら建設運転してきた。しかしながら次世代型となると本体だけでも1兆円以上のコストがかかるため、上記四極が協力し合い、世界で1つ建設することが決まっていた。そしてその立地地点は、立地国が建設コストの半分以上を負担するなど「加重条件」をつけて選定が進められていた。本来ならもう2年も前に決まっているはずが、日本とEU連合が互いに譲らず、最近までもつれ合ってきたものである。日本側の候補は青森県の六ヶ所村であるが、これも、他に実験炉を持つ東海村や、広大な土地提供を申し出た苫小牧の3候補の中から、「テクニカルには甲乙付けがたいので高度の政治的配慮」で、六ヶ所村に決まったものである。ここで高度の政治的配慮とは、平たく言えば、原子炉の使用済み核燃料再処理施設の立地を引き受けた同村へのお土産に他ならない。ここまでして再処理施設を移動したいとは、納税者の一人としてはあっけにと取られて言葉も出ないが、冷静に考えても、核融合関係の研究実績皆無のこの地は、建設・研究経済上明らかに無謀であった。そしてフランスの、高度な研究所が現にあるカダラッシュに決まって、世界的視野からは目出度し目出度しと言うわけだが、日本的に見ても、どうしても核融合炉を持てきたいというよりは、「六ヶ所に何でも良いから高価でイメージの良いお土産をやりたい」というのが本音であるから、決定時期を2年も引きずって「ねばった」という「実績」を作った以上は、もう駄々をこねずに譲るのが賢い外交と言うものである。そして実際そのようにして、世界と六ヶ所の両方の「顔を立てた」。もういいではないか。国も十分にパフォーマンスをしたのだからこの辺で譲って。日本に持ってこられたって、お守りは結局税金の注入だ。これ以上我々の税金を下らない物に無駄遣いされないためにも、「文部科学省は良くがんばった」と、みんなで調子を合わせて言おうではないか。

2005 年 5 月 17 日（火）

脆弱工学の勧め

物を作るときには、例えば耐震基準のような安全基準があって、その人工物が寿命だけ持つように設計・施工される。それ自体は悪くない。さ

でここで、物作りの簡単な例として、棚を吊ることを考えてみよう。棚板の4隅を天井から糸でつるすとする。この場合に通常は、棚が落ちてこられては困るので、4隅の糸は同じくらいに丈夫な糸を用いる。しかしながらここで発想を転換して、糸はいずれは切れるものとの前提に立ち、「どうせ切れるなら、切れても一番害のないこの糸に切れて欲しい」と糸に順位をつけ、切れてよい糸をあえて弱くし、その代わりその下ではできるだけ作業をしないようにしたらどうであろう。設計時には想定しなかった事象により、あるいは経年劣化により破壊する時、こうしておけば罹災を免れることができ、より安心である。かような設計方法はまだ世間に認知されているとはいえないが、筆者はこれを「脆弱工学」と名づけて、ここに提案するものである。

2005年5月16日（月）

義経と企業技術者

源平合戦に於いて義経は、その天才的軍事技術・能力を遺憾なく発揮し、平氏を壇ノ浦に滅亡させる。その間に頼朝がやっていたことは、鎌倉に鎮座して自分の回りを固めることであった。義経は、壇ノ浦が終わると、「脱兎死して走狗煮らる」の例えどおりに、頼朝に邪魔者として追討される。義経の活躍がなければ平氏は生きながらえ、おそらく頼朝政権は高々、関東地方のみに勢力を持つ地方政権に終わっていたことだろう。場合によってはその後滅ぼされていたかもしれない。頼朝は政治力や寝技はあったかもしれないが、軍事的才能はさほどでなかった。むしろ、源氏の嫡流であることにあぐらをかいて、自分の取り巻きを固めることに専念した。そして天下は頼朝に転がる。この、自分では手を汚さずに都合の良い時だけ技能者を使いあとは捨て去る悪弊は、今の企業や、自衛隊など政府現業にあまねく見られることだが、歴史的に見ると、この寝技が技術者を抑えるパターンは、頼朝によって居直りの正當化されたと見ることができる。このような悪弊は、短期的には良くて長期的には国を滅ぼす。源氏もわずか3代で滅んだ。しかしながらこの日本に染みついた悪しき癖は、しばしば外圧がないと直らない。内輪でやっているうちは何も困らないからだ。

2005年5月15日（日）

小錦の業績

もう10年位前になろうか、トンガ出身の関取の小錦が、一旦大関まで昇進しながら、その後の業績芳しくなく、再び平幕に陥落するということ

があった。そもそも相撲というのは日本文化の花であって、このころは横綱、大関は陥落したり負け越したらそれ以上相撲を続けることを恥として引退するのが通例であった。ところが外国力士の小錦にはそんな常識はなく、陥落しても体が続く限り平気で力士を続けていた。他の力士はもちろん、観客であった日本人にとっても意外なことであっただろう。一種のカルチャーショックと言ってよい。この期を境に日本人力士も、いや相撲に限らずあらゆるスポーツ・業界で、「負け越し＝恥＝引退」と言う図式が消え去った。これは、本人は認識していないかもしれないが、小錦がした最大の偉業であると思う。まことに小錦は、現代の黒舟であった。

2005 年 5 月 14 日（土）

団塊世代の聞かれない本音

ホリエモンのフジ・サンケイグループ買収劇は、一応両者が矛を納めた形になって、今は小康状態となっている。この買収劇には色々面白い局面があったが、その一つに、今企業をリタイヤしようとしている、あるいはリストラされようとしているいわゆる「団塊の世代」のホリエモン支持率が高かったと言うアンケート結果がある。この団塊の世代は、日本の高度成長期を担い、馬車馬のように働かされ、その割りにポジションがなくて冷遇され、あるいはリタイヤ目前にリストラされて捨てられてもまだ従順な、牛馬のような世代である。牛馬のように扱われても大して文句を言わず、使用者にとってはまことに扱いやすい世代であった。もっとはっきり言えばバカたちである。私もつい最近まで、世代まとめてバカたちだと軽く考えていた。そこに今度のアンケート結果である。私はちょっと意外だったが、意外と言う以前に、このような形での蠅螂の斧的なささやかな反抗しかできないこの世代が、なおの事いっそうにしみつたれてみすばらしく見えた。捨てられた後もなおかつ奴隷根性かよ。バカは死んでも直らないって本当だねえ。もう見たくないよ、あの人たち。

2005 年 5 月 13 日（金）

愛・地球博はなぜ高いか

愛・地球博が色々高いと「問題」になっている。入場料は高い、レストランのメニューは高い、しかも原則持ち込み禁止で強制的に利用させている等々である。この割高感の根底には、「なぜ環境に配慮しているのに高いのだろう、資源をリサイクル・再利用しているのにむしろ安くなるべきではないか」と言った「先入観」があるように思う。この先入観はあ

る意味正しい。再利用する分だけ原資代は安くなる。しかしながらリサイクルの工程は再利用のみではない。収集、分別、再精錬、再加工といった付加的工程が不可欠である。しかもこれらの工程を、環境に影響を与えずに「閉じた系で」しなければならない。だから、一言で言えばリサイクルは割高で、環境は金で買うものなのだ。イメージは奇麗事だが実体は金である。だから地球博が高いのはむしろ当たり前であって、「環境は金で買う高いもの」と言う本音をそのままに教えてくれる施設なのである。だから皆さんも地球博に行って、環境が如何に面倒で高くつくものか、実感してきてもらいたい。

2005 年 5 月 12 日（木）

in silico

薬理作用などを表現する時に、試験管などによる実験の結果をラテン語で”in vitro”と言う。「ガラスの中で」の意味である。そして臨床実験や動物実験の結果を”in vivo”と言う。「生体内で」と言う意味だ。従来薬理作用は、in vitro か in vivo であった。ところが最近の計算機の飛躍的な進歩により、薬理作用が量子力学的に、あるいは統計的に、多くの仮定や近似をしているものの計算機でかなり定量的に予言できるようになってきた。この「第3のモード」を、計算機の演算素子がシリコン化合物であることから、”in silico”と言うようになってきた。計算機によるシミュレーションは、まだ実験に完全に置き換わるところまで行っていないが、実験の回数を減らして余計な臨床実験や動物実験を削減するところまで来ている。毒性化合物も計算機上ならなんらの危険もない。今後はますます in silico に頼る割合が多くなるだろう。

2005 年 5 月 11 日（水）

社報と人民日報

どこの会社にも社報はあるだろう。IT 化の進歩に伴う「ペーパーレス運動」も多くの会社でやっていることと思うが、なぜか「社報も電子情報にして各人適宜アクセスする」という話は聞いたことがない。なぜか依然として紙に印刷され、冊子になって配られる。欲しくなくても配られるのだ。要するに内容がつまらないから「適宜アクセス」ではほとんどの人が読みに来ない、それでは足りないということだ。ではなぜ足りないのか。これはつまらないこととも関連するが、社報が社員の意識の方向付け、マインドコントロールの重要な手段になっているからだ。やんわりとした強制である。このような世論統制の道具が世の中にはもう一つあ

る。共産党系国家の機関紙だ。都合の良いこと、マインドコントロールしたいことしか書いてない。人民日報然り、旧ソ連のプラウダ然りである。ちなみに「プラウダ」とはロシア語で「真実」のことである。”Prauda, njet prauda”（プラウダ誌は真実でない）ということわざまであったほどだ。で、社報がここまで非人間的な国家共産党の機関紙に似ていると言うことは、少なくとも日本の会社は限りなく、共産党一党独裁国家に似ていると言うことを意味する。マルクスの予言は、レーニンの革命は、日本の会社に於いて実現されているということだ。何という皮肉であろう。

2005年5月10日（火）

今を生きるのに必死

私は知り合いの少ない方だが、それでも1人、現役の議員と知り合いである。彼は天下のT大学を出てはいるが、長い間民間の大手商社にあって日夜仕事に励み、その会社の常務から参議院戦に打って出て当選した人だ。経団連の支援等はあっただろうが、別に2世でもなんでもなく、そういう意味では「たたき上げ議員」と言って良い。その人の努力と人脈の広さは尋常ではない。あらゆるところに網がで、あらゆるきっかけを自分を広げるのに使い、その隙のない行動様式は見事である。だが私は気づいた。若いころはこの人を尊敬していたが、今は分かった。この人は必死ではあるが、眼中には「今」しかない。今どれだけ持っていて、何をしていた、それをすると何点稼げて、と、ひたすら目線は「今」と「人」のみであり、それで精一杯なのだ。そんな人生を見ていて私はむなしさを感じた。常に人の目線を意識し、点稼ぎに血眼になって、やっと得た議員の地位。そこまでして今に閉じこもりたいのだろうか。もっと未来を見ようとししないのか。自分が死んだずっと後の人類の幸せについて、ゆっくりと瞑想しないのか。私は今もこの人を偉いとは思っているが、見習おうとは全く思っていない。むしろ季節に感じ、俳句など読みながら、人生の豊かさに感じ入って生きていきたい。

2005年5月9日（月）

同級生4人の末路

今から約40年前、東京大学工学部の某学科を卒業した仲良しの4人は、同じ分野に職を求めた。同じ分野と言っても、一人は官僚になり、もう一人は国立の研究所に入所し、更にもう一人はメーカーに就職し、最後の一人は大学に残った。ちなみに卒業時の成績は、国研、大学、メーカー、官僚の順だった。官僚になった人は、その後次官まで登りつ

め、某国大使に転出し、今は某大学の学長をしている。大学に残留した人は、その後助手、助教授、教授と順調に進み、今はその分野の国の安全委員会の会長をしている。国研に勤めた人は、その後その国研の所長を経て、今は先に述べた安全委員会の委員長代理をしている。元同級生とはいいいながら、教授経由の方が優先されるようだ。最後にメーカーに勤めた人は、その会社の副社長まで登りつめたが、運悪くその副社長時代に自己隠しが発覚して、引責辞任した。みんなそれぞれのおかれた場所で、忠実かつ必死に仕事をしてきた。だが、結末を見る限り、世の中には忠実と努力だけでは割り切れない別の要因があるようである。運の良い仕事と悪い仕事があるのだ。もっともそれぞれが世の中にどれだけ貢献したか、今までの人生にどれだけ満足しているかと言え、これは別の話だが。

2005 年 5 月 8 日（日）

とにかく逃げなさい

昔、Y 新聞に「ヘレンおばさんの人生相談」と言うコーナーがあった。人生の達人であるヘレン・ボッテルという米国のおばさんが、読者から寄せられたさまざまな人生相談に、人生経験の味付けをした米国流の合理主義で回答していくと言うもので、全体が翻訳だったようである。その回答にはいちいち「さすが」「合理的」「米国流」と感動していたが、今でも覚えている相談に次のようなものがあった。曰く、「私の主人は生前、偉大な篤志家として町の人々から尊敬されていましたが、長い間一緒に暮らした私にとって、彼は見栄っ張りの八重人格以外の何物でもありませんでした。でも、その素顔を知らない町の人からは、あの人の後継者と言う目で見られて、苦痛で耐えられません。どうしたらいいでしょうか、という相談であった。日本人に相談したら、おそらく、我慢しなさいとか、あなたの思い違いでしょうなどといわれるところだろうが、これに対するヘレンおばさんの回答は、「これぞ合理主義」と感動するほど素晴らしいものだった。曰く、すぐにその町を去りなさい。おそらく親しい友達の何人かも居るでしょうが、その人たちにも行く先を告げずに忽然と姿を消しなさい。そして新天地であなたの本来の人生を始めなさい。さもないとあなたは今の重みで早晚自殺してしまうでしょう、という回答だった。何という深い人間洞察。何という徹底した合理主義。何という冷徹で深い愛。米国人全員がこうだとは言わないが、決して少なからず居る。それにしても真の愛は合理主義の上に立つことを、このおばさんは教えてくれた。

2005 年 5 月 7 日（土）

タケコプター

「こんなこと良いな、できたら良いな」、今や国民的アイドルであるドラえもんのテーマソングの出だしである。ドラえもんの「道具」はたくさん有るが、一番有名なのはおそらく「タケコプター」であろう。テーマソングの歌詞にも入っている。それではタケコプターは実現可能であろうか、と聞かれれば、答えは残念ながら「否」である。一番不可能なのはタケコプターと頭の接着部分で、あのような狭い断面積で全体重を支えるほど人間の頭皮は強くない。皮がはがれてしまう。では一步譲って、タケコプターつきのヘルメットをかぶる方式でどうかと聞かれると、まだだめである。人間の首は、あのような「急激」な前後左右の動きについていけないほど頑丈にできていない。直ちにむち打ち症になったり頸骨骨折をしてしまう。結局は人間の場合、自分の体重は体全体で支えないとだめである。そしてかような体全体で支えたもっとも簡単な例がハングラライダーである。ハングラライダーの構造は全身を支えるものとしてはおそらくもっとも簡素であろうが、あのように簡素で済むのは空を滑空するからであって、タケコプターのように何らかの推力を用いるならばもっと頑丈にしないといけない。加えて推力源も保有しつつ浮揚する必要がある。こう考えていくと、結局人間にはヘリコプターがどうしても必要だと言う結論になってしまう。人一人を運ぶのに、その何倍も重いヘリコプター本体と言う鉄の塊を運ばなければならないのだから、考えようによっては極めて非効率ではあるが。

2005 年 5 月 6 日（金）

良いと思うならなぜ買わないんだ

欧米人は東洋人のように「以心伝心」でもなければ「美観が発想の根幹」でもない。論理的合理性が唯一の規範である。かような欧米人の売込みには一定のパターンと言うか技術がある。彼らは取引のないようなところに突然飛び込んでいきなり一通りの説明をする。その後、どう感じたか、つまり売り込みたい製品が良いか悪いか聞く。ここでたいの日本人は、面倒くささもあって「まあ良いんじゃない」と答えるだろう。そうすると、「良いと思うなら今すぐ買え」と迫ってくる。買いたくないと答えると、「良いものをなぜ買わないんだ」と半分食ってかかる。中には「買わないなら説明のために消費した時間と労力に対し対価を払え」とまで言う外人も居る。頭にきて、「うちは信用のないところからは買わ

ない」とはっきり断ると、「俺が今までうそを言ったというのか、場合によっては訴えるぞ」と来る。もう完全に向こうのペースである。こっちが客なのに、引き取ってもらうのに一苦労だ。だから外人の売込みを聞くときは半端な気持ちで聞いてはいけない。ではまじめに聞いて、何とか欠点を見出し、「ここが気に入らない」と答えたでしょう。それですごくご帰ってくれると思ったら大間違いだ。「お前たちのコメントは良く分かった。1月以内に直してくるから今すぐ買う約束をしろ」とやはり迫ってくる。場合によってはそう言わなくても、1月後にまた現れて、「コメントを反映したから今度こそ買え、買わないと今までのコメント対応の労力の対価を請求する訴えを提起するぞ」と来る。そして彼らは結構本気なのだ。つまり頭の論理構造がこうできている。私のかつての上司は、彼らの発想が日本の習慣と違うことを何時間にも渡って正面から説明したが、結局理解されなかったと言っていた。こういう論理構造をしている奴らを追い払う万能な方法を私はいまだに知らない。できれば会わないことだ。

2005年5月5日（木）

ハッカーの就職先

ハッカーの語源は英語の”hack”（切り裂く）であって、ハッカーとは他人のサーバー（コンピューター）に不法侵入して、情報を奪取したり書き換えたりする者を言う。もちろん犯罪であるが、ハッカーには相当の知識と熟練が必要とされるため、その多くは若年知識層である。ハッキング行為が見つけれ犯人が特定されると、その犯人は当然逮捕されるわけだが、米国には司法取引制度があって、犯罪に関する知りえる事実（ハッキングの具体的手口など）を報告する代わりに罪が軽減される。そしてハッカーの場合、多くが司法取引で無罪になった後、国防総省やFBIと言った情報機関に高給で雇用され、海外情報の奪取技術の開発や海外からのスパイ行為摘発の任務に従事すると言う。つまり、ハッキング技術を有するような有能な青年を、意味無く刑務所に閉じ込めておくよりも、情報技術の先端技術者として従事させた方が国家にとってよっぽど利益だと言うのである。米国らしい合理的な発想である。

2005年5月4日（水）

退職した元上司

私の今乗っている車はたまたま外車なので、ちょっとした用でディーラーを1年ぶりに訪れた。すると、懇意にしていたそのマネージャーが退職していた。そこでその辺にいた元部下に、「あの人はどこへ行かれ

たのですか」と聞くと、「さあ、退職された人なのでよく知りません」と答える。「転職ですか、それともリタイアですか」と聞いても「さあ、ちょっと分かりかねます」と答えるのみ。しかも、一時は上司・部下の関係で一日の大半を一緒に、緊密な関係で過ごした相手について、知らないし知りたくないのが当然かの態度であった。つまり、彼らの間に、家庭交流などはもとより、終業後飲みに行くと言ったウェットな関係は全く存在せず、彼らにとって職場は単に生活の糧を得る場でしかないのだ。だからと言って、そのマネージャーが居た時の上下関係がギクシャクしていたわけでもない、要するに大人の付き合いなのだ。私はこの、アメリカ流のビジネスライクな態度に返って好感を持った。外資系ディーラーと言うよりドライになりやすい職場ではあるが、何かと言うとすぐに「ノミネーション」を良しとする日本的企業風土に辟易としていた私は、自分の職場ではないとは言いながら、日本にもこんな職場があるのかと、世の中がパーっと明るく輝いた思いすらした。会社は所詮利益を得る必要悪の仮の世、これで良い。

2005 年 5 月 3 日（火）

TQC

会社とかで、管理職研修などと称して、課長昇任者を集めて研修をすることはよくあることだが、なぜかお題は TQC(Total Quality Control)であることが多い。TQC のうたい文句は、「旧来の QC(品質管理)が数理統計に偏っていたのを改良し、キーワード集約とか、実例解決などの事例検討を大きく取り入れて、実践的に問題解決に使える一群の技術・洞察法」であると言う。いかにも経営層が飛びつきそうなうたい文句だ。だが受ける方にしてみれば、身近でもなんでもない問題をネタに、奇麗事で要領良くまとめ、済ませておしまい、あとは関係ないといった、しょうもない「訓練」に過ぎない。強いて価値があるとすれば、会社員である以上必要悪である、自分をピエロ化するというテクを、もちろんオンザジョブで既に身に付けてはいるが、再確認すると言った程度のものである。こんな茶番に3日も付き合っ、給料をもらう方としては下らない会議に出席するようなものだからことさらに感慨もないが、全くもって経営層の自己満足以上の何物でもない。こんな下らないことしか経営層は思いつかないのかと、これも普段から分かっていたにせよ、改めてがっかりするのみだ。世の中ここまで茶番で本当に良いのかよ。日本も平和ボケしているね。ホリエモンが、「社員教育、それ何ですか、そんなも

のやりませんようちは」と言っていたが、このような当たり前の発言が名言に聞こえるほど、日本の会社は茶番が多い。

2005 年 5 月 2 日（月）

わが社

日本人は自分の会社のことをしばしば「わが社」と呼ぶ。私物化しているというよりも、愛社精神の発露である。しかし英語ではこういう言い方はしない。少なくとも”my company”ではなく”our company”なのだが、こういう言い方もせず普通は”my office” ”our office”と言う。ところで英語で”your company”と言ったときの”you”とは誰のことであろうか。実はこの”you”とは社員のことでもお客様のことで、ましてや立地地域住民のことでなく、株主のことである。資本主義の理念に立ち返るならば会社は先ず第一に投資家、すなわち株主のものなのである。英語では会社を株主の種類により、”government owned company”, ”public owned company”, ”private owned company” と分類する。前者から、公社、普通の（雇われ社長の）会社、自営の会社を意味するが、いずれも株主の種類により分類した表現である。これほどに会社経営に株主の意向は尊重されている。ところが民主主義の根付いていない日本は違う。株は持ち合い、配当は少なく、株主総会は形のみだ。ホリエモンはこういった日本のゆがんだ資本主義に活を入れようとしている。すくなくともけっかてきにはそのやくわりを果たしているのだから、日本人の意識改革という重要な歴史的責務を自らに課しているといえる。彼には最後まで妥協なくやり遂げて欲しいものだ。

2005 年 5 月 1 日（日）